

こんな本も読んでみましょう

選者：さいたま市立上小小学校 教諭 新井 千恵子

日本の昔話

「ねずみのすもう」

森のあきちで、ねずみが二ひき、すもうをとっていました。

「デンカショ、デンカショ…」なんだろうとおもって、音をたよりに森へいくと、こちこちにやせた、やせねずみと、ころころにふとった、こえねずみが、すもうをとっていました。やせねずみがすんでいるいえのおじいさんは、おばあさんに、もちをついてたべさせたいとはなしました。すると、やせねずみは力もちとなり、あつというまに、こえねずみをなげてしまいました。びんぼうだったおじいさんの家には…。

日本の昔話

「たにし長者(ちょうじゃ)」

ふうふのねがいがかなって、たにしほど小さい子をだいじにそだてると？

子どものないふうふのねがいがかなって、ある日水がみさまの、もうし子の小さな、つぶ(たにし)くらいの子が生まれました。その子があるとき、年ぐ米(ねんぐまい)をちょうじゃどんのところへ運んでくれることになりました。たいそうよろこんだ長者どんは、その子にむすめのゆかをよめにくれました。そのゆかのけなげさが、むこになった子をりっぱな男の人に…。

日本の昔話

「ももたろう」

ももがぱっかりわれると、げん気ななきごえといっしょに、男の赤んぼうが…！

ももから生まれた「ももたろう」。おじいさんとおばあさんは、たいせつに、たいせつにそだてました。ごはんを一ぱいたべれば一ぱいぶん、二はいたべれば二はいぶんと、日ましに大きくなりました。大きくなった「ももたろう」は、おにがしまへ、おにたいじにいくことにきめました。さあ、「ももたろう」のたびがはじまります。